

知覚動詞と裸不定詞補文との整合性

松本, 知子
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6791154>

出版情報 : 九大英文学. 50, pp.425-450, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



知覚動詞と裸不定詞補文との整合性*

松本 知子

1. はじめに

英語において、知覚動詞は、(1a)のような裸不定詞補文をとることができるが、この知覚動詞構文は(1b)のように主節の知覚動詞を受動化することができない。また、(1c)のように to が音形化されると非文法的になるが、それに対応する受動文は(1d)に示されるように文法的になる。このように、知覚動詞の裸不定詞補文は非常に特異な振る舞いをする。

- (1) a. We saw John draw a circle. (Felser 1998: 351)
b. *John was seen draw a circle. (ibid.: 365)
c. *We saw John to draw a circle. (ibid.: 352)
d. John was seen to draw a circle. (ibid.: 380)

この統語的振る舞いに関して、一般的には、(1d)の受動文は、(1a)が受動化され、to が顕在化したものと考えられている。ではなぜ to が顕在化するのか、また、なぜ(1a)に対応する(1b)の受動文が認められないのかが問題になる。

そこで、本稿は、(1)に挙げる知覚動詞の裸不定詞補文の統語的振る舞いについて、Chomskyのフェイズ理論の援用により、統語構造の観点から説明できることを示す。¹ 具体的には、不定詞標識のtoのあるなしで意味的にも統語的にも違いがあると考え、知覚裸不定詞補文は $\check{V}^*P$ 構造を有し、to付きの不定詞補文はTP構造を有すると分析する。² また、英語の裸不定詞補文に対応するゲルマン語系の裸不定詞補文の文法的特

徴から、ゲルマン語系の言語で顕在的に起こっている verb raising が英語では非顕在的に起こっていると考えられる。つまり、英語の裸不定詞補文の主要部(v)が主節の動詞位置へと主要部移動を行うと分析する。この covert verb raising により主節と従属節の時制の同時性が捉えられるだけでなく、(1)の文法性も捉えられることを示す。

以下に本稿の構成を示す。第二節で、知覚動詞の裸不定詞補文に関する従来の分析の問題点を挙げる。第三節では、提案を述べ、それを特徴付ける文法的性質を挙げる。第四節で提案を基にした分析を行う。第五節で分析の拡張として知覚動詞の補文主語からの wh 句の抜き取りに関する事実の考察とイタリア語とフランス語とスウェーデン語の裸不定詞補文の分析を行う。第六節で論をまとめる。

2. 従来の分析の問題点

従来の研究では、知覚動詞の補文の構造として CP 構造と IP もしくは TP 構造、そして小節構造が仮定されてきた。そこで、まず CP 分析と IP もしくは TP 分析の問題点を挙げる。それから小節分析の問題点を挙げる。

まず、裸不定詞補文を CP と分析すると(2)のように C head と I head の2つの非顕在的な head が存在することになる。これには経験的な問題が存在する。

- (2) see [CP [C Ø] [IP him [I Ø] [VP draw a circle]]]

1 点目の問題点として補文主語 (照応形)の認可の違いが挙げられる。もし知覚動詞補文が(2)の構造であるなら、(3a)の want 型の不定詞補文に対する(3b)と同一の構造を有することになる。

- (3) a. John wants Mary to win the race.
b. John wants [CP [C Ø] [IP Mary to win the race]]

しかし、補文主語が照応形である場合、(2)と(3)では主語がそれを束縛

できるかどうかには違いがある。(4a)に示されるように、*want* 型の主節主語は補文主語を束縛できないが、(4b)のように知覚動詞の主節主語は補文主語を束縛できる。この事実から、裸不定詞補文には *want* 型補文のような CP 投射がないと分析できる。

- (4) a. *Peter and John_i wanted each other_i to win the race.
b. Mary_i saw herself_i stand in the mirror.

2 点目に、*pseudo-cleft sentence* (擬似分裂文)に関する文法性の違いが挙げられる。Radford (2004)でも述べられているように、通常 *pseudo-cleft* で焦点位置に生じるのは CP であり、(5a)の *want* 型補文の擬似分裂文には *for* と *to* が顕在化することが知られている。しかし、(5b)の知覚裸不定詞補文の擬似分裂文にはそれらが生起できない。また、(5b')からわかるように、*for* と *to* が顕在化しなくても非文法的である。³ 従って、裸不定詞補文には CP 投射が存在しないと考えられる。

- (5) a. What she really wanted was *for* him *to* apologise.
(Radford 2004: 106)
b. *What John saw was *for* Mary *to* draw a circle.
b'. *What John saw was Mary draw a circle.

次に、裸不定詞補文を IP もしくは TP と分析する際の問題点は、典型的には IP (TP)として分析される ECM 補文と裸不定詞補文の間には意味的・統語的な違いがあり、一様に IP (TP)分析できないことである。これに関しては 3.1 節で議論する。

最後に小節分析の問題点を挙げる。小節補文は裸不定詞補文と同様に *to* を含まない補文であるという共通点から、裸不定詞補文が小節であると分析される。しかし、以下のような経験的な問題が生じる。

まず、主節動詞の受動化に関する振る舞いの違いが挙げられる。裸不定詞補文を小節補文と同様の構造を有すると分析すると、(1b)とは違って

(6b)のように小節補文主語が受動化できることをどのように説明するかが問題になる。

- (6) a. Mike considers Sue intelligent.
b. Sue is considered intelligent by Mike.

2点目に補文の選択する述部の意味の違いが挙げられる。裸不定詞補文は一時的状態、出来事を表す述部 (stage-level predicate)を選択するのに対して、小節補文は永続的な状態を表す述部 (individual-level predicate)を選択する。

- (7) a. Mike considers Sue intelligent. (=6a))
b. We saw John draw a circle. (=1a))

以上のような3つの分析の問題点を踏まえて、3節で裸不定詞補文の v^* P分析を提案する。

3. 提案：裸不定詞補文の v^* P分析

3節では、2節で挙げた従来の分析の問題点を踏まえて、裸不定詞補文の意味的・統語的特徴を捉える構造を提示する。(8a)の構造は(8b)のようになると考えられる。

- (8) a. We saw John draw a circle. (=1a))
b. [_{CP} C [_{TP} we_i T [_{vP} t_i saw [_{VP} tv [_{vP} John [_{v*} [_{v*} draw] [_{VP} tv a circle]]]]]]]]

(8b)の派生では、まず、drawとa circleがmergeしてVPを作り、動詞drawはnullな軽動詞 v^* に付加する。そして、Johnがmergeして v^* から行為者の θ 役割をもらう。次に、主節のVであるseeは、補部 v^* P とmergeした後、主節の v^* とmergeして、nullな軽動詞 v^* に付加する。Johnは主節の

v^* とAgreeして、対格を照合される。さらに派生が進み、主節のSpec, v^*P にある主語weがSpec-TPに移動する。そして、CPまで派生が進み収束する。

ここで、主節と従属節との時制の同時性を保障するために、ドイツ語やオランダ語に見られる verb raising が英語においても存在すると仮定する。ただ、英語においてはそれが顕在化しないだけである。この点に関しては 3.2 節で議論する。

3.1. 英語の裸不定詞補文と ECM 補文との違い

この節では、(8b)の v^*P 構造の妥当性を検証するために、英語の裸不定詞補文と典型的にはIPもしくはTPとして分析されるECM補文の統語的・意味的特徴を挙げ、それらの間には統語的・意味の違いがあることを示す。まず、統語的相違点を(9)から(11)に挙げる。(9)は文副詞の生起の違いを示している。文副詞は通常Iの投射内で認可される要素なので、文副詞が生起すればIの投射があると考えられる。裸不定詞補文の場合はECM補文とは違って文副詞が生起しないのでIの投射がないと考えられる。

- (9) a. *I saw John (certainly/clearly) murder the woman.

(Matsuyama 1999: 420)

- b. *We saw John regrettably walk away. (Felser 2000: 5)

- (9)' John considers Mary probably to be scared of snakes—certainly, she is scared of snakes. (Nakajima 1991: 40)

(10)は文否定の not の生起の違いを示している。文否定の not も文副詞と同様に I の投射内で認可される要素なので、裸不定詞補文には ECM 補文とは違ってそれが生起しないことから I の投射がないと考えられる。

(10) a. *I saw the ice not melt. (Mittwoch 1989: 108)

b. *I felt the wasp not sting me. (Felser 1999: 49)

(10)' We believed John not to be crazy.

次に、(11)のように、裸不定詞補文と ECM 補文は、補文標識、法助動詞、屈折を表す要素が生起しない点で共通しているが、裸不定詞補文は ECM 補文と違って、to や完了相の have、進行相の be が生起しない。

(11) a. *I saw that/for John draw a circle.

b. *We saw him will/might/can/... draw a circle.

c. *We saw him draws circles.

d. *We saw him to draw a circle.

e. *We saw him have drawn a circle.

f. *We saw him be drawing a circle. (Felser 1999: 25-26)

(11)' a. *I believe that/for John to be a genius.

b. *I believe John will/might/can... to be a genius.

c. *I believe John to is a genius.

d. I believe John to be a genius.

e. Geno believed Rebecca to have won the game.

(Martin 2001: 150)

f. Sue believes Alfred to be smoking. (Rooryck 2000: 18)

以上の特徴から、裸不定詞補文には顕在的に時制を表す要素が生起しないことと、典型的には IP もしくは TP として分析される ECM 補文と統語的振る舞いが異なることがわかる。裸不定詞補文の統語範疇を $v^{(*)}P$ と考える本論の分析のもとで、これらの文法的特徴はうまく説明されることが考えられる。

次に、(12)と(13)は裸不定詞補文と ECM 補文の意味に関する違いを示す。

まず、ECM 補文は(12)'に示すように、永続的状态を表す述部 (individual-level predicate) でなければならないが、裸不定詞補文の述部は(12)に示すように、一時的状態、出来事を表す述部 (stage-level predicate) でなければならない。Diesing (1992)は、定形節において stage-level 述部の主語は[Spec, VP]に現れ、それから[Spec, IP]に繰り上がり、individual-level 述部の主語は[Spec, IP]に基底生成されると分析している。

(12) a. We've seen so many people drunk/*intelligent.

b. I saw him buy/*like flowers. (Felser 2000: 6)

(12)' I believe John to be intelligent.

(13)は補文内の主語が裸複数名詞句であるときの解釈の違いを示している。裸不定詞補文の場合は、存在量化の解釈がなされ、ECM 補文の場合は総称量化の解釈のみが許される。

(13) We saw dinosaurs eat kelp. (Felser 1999: 51)

*総称量化の解釈：私たちは見た+恐竜はふつう海藻を食べるものだ

存在量化の解釈：私たちは見た+海藻を食べている恐竜がいる

(13)' We believe dinosaurs to eat kelp. ⁴

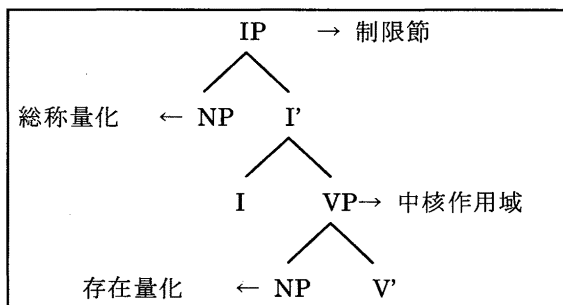
総称量化の解釈：私たちは信じている+恐竜はふつう海藻を食べるものだ

*存在量化の解釈：私たちは信じている+海藻を食べている恐竜がいる

Diesing (1992)はこの解釈の違いを構造に反映させ、(14)のような写像仮説を提唱している。写像仮説とは裸複数名詞句が VP 内に写像されれば存在量化を受け、IP 内に写像されれば総称量化を受けるというものである。この考えに基づけば(13)の事実は、裸不定詞補文の場合は存在量化しか受けないので、IP が投射されないことを支持する。

(14) Diesing (1992)の写像仮説

中核作用域 (VP)に写像されれば存在量化を受け、制限節 (IP)に写像されれば総称量化を受ける



ここで注目すべきことは、Diesing (1992)によると、定形節において stage-level 述部の場合、主語はもともと [Spec, VP] にあって、そこから [Spec, IP] に移動しているので、LF で [Spec, VP] に再構築される可能性があり、結果として主語には存在量化の解釈と総称量化の解釈の両方が許されるということである。しかし、裸不定詞補文の場合、主語には存在量化の解釈しかされないため、補文主語は [Spec, VP] 内にとどまっていると考えられる。つまり、主語は [Spec, IP] に移動していないと分析できる。次に、individual-level 述部に関して、Diesing (1992) は、主語はもともと [Spec, IP] にあって、[Spec, VP] は PRO が占めているので、[Spec, IP] の主語が VP 内に再構築される可能性はないと分析している。Diesing (1992) の分析に従うと、ECM 補文は、総称量化の解釈しかされないため、補文主語は [Spec, IP] にあると考えられる。従って、Diesing (1992) の分析から、(12) と (13) のような述部に関する制限は、裸不定詞補文の統語範疇を v^*P と考える本分析のもとでうまく説明される。

3.2. ドイツ語・オランダ語の裸不定詞補文と Verb Raising

この節では、3.1 節と同様に、裸不定詞補文の v^*P 分析の妥当性を検証するために、英語の裸不定詞補文と共通した特徴を持つゲルマン語系の

- (15)から(18)の例から、英語の裸不定詞補文はゲルマン語系の言語の裸

不定詞補文と共通した文法的特徴を持つと考えられる。ここで注目すべきことは、ゲルマン語系の言語においては verb raising があるということである。verb raising とは節の right periphery に動詞の融合体を作る移動操作である。Printzhorn (1990)は知覚動詞の裸不定詞補文では verb raising が義務的に起こると述べている。

<ゲルマン語系の言語に特有な現象>

(19) Verb Raising ⁵

- a movement or reordering process that leads to a clustering of verbs at the right periphery of the clause

(Felser 1999: 214)

- verbs of perception take complements without the infinitival marker “zu” and they always form a verb complex.

(Prinzhorn 1990: 199)

a. *dass wir ihn haben singen hören* (German)

that we him have sing hear

b. *dat we hem hebben horen zingen* (Dutch)

that we him have hear sing

both: ‘…that we have heard him sing.’

(Evers 1975)

Bennis and Hoekstra (1989)は、この verb raising と主節動詞が受動化できないこととの関連について興味深い分析をしている。具体的には、(16b)の主節動詞が受動化できない事実と顕在的な verb raising が存在する事実を関連づけて、過去分詞になった主節動詞の位置に補文内の動詞は raising できないと分析している。つまり、主節動詞が受動化される時に verb raising は適用できないということである。

3.3. Verb Raising による動詞融合の理論的説明—Chomsky (2005)のフェイズ理論を用いて

Bennis and Hoekstra (1989)の分析を現在の Chomsky (2005)の理論の基でどう捉えられるかを検証してみる。そこで、(20)のように、統語操作を引き起こすのはフェイズ主要部であると考ええる。(20)に従うと、知覚動詞の裸不定詞補文の受動文の場合は、主節動詞がフェイズを形成しないために、いかなる操作も駆動できないことがわかる。

- (20) If only phase heads trigger operations (as I will assume), then IM (Internal Merge) will satisfy EF (edge feature) only for phase heads. (Chomsky 2005: 9-10)

ここで、Chomsky のフェイズ理論を援用して、(8b)の構造について分析していく。その前に、まず、裸不定詞補文には時制解釈上の問題点が存在することを説明する。それは、補文内には TP がなく補文内の動詞は時制が指定されず不安定であるということである。また、Chomsky のフェイズ理論で提唱されている(21)の PIC により、主節の T から補文内の動詞にはアクセスできないことから補文内の時制をどう保証するかが問題になる。

(21) Phase Impenetrability Condition (PIC)

The domain of H is not accessible to operations at ZP; only H and its edge are accessible to such operations.

$[_{ZP} Z \cdots [_{HP} \alpha [H YP]]]$ (HP and ZP strong) (Chomsky 2001: 14)

そこで1つの説明方法として補文内の動詞に解釈不可能なV素性が存在すると仮定することができる。そのように仮定すると、主節動詞が補文内の動詞と Agree して補文内の動詞が非頭在的に移動し、解釈不可能なV素性が削除されると考えられる。そして、補文内の動詞が主節に移動することで、主節の時制と関連づけることができる。

以上のように、英語とゲルマン語系の言語の裸不定詞補文の特徴が共通していることから、ゲルマン語系では顕在的に起こっている **verb raising** が英語では非顕在的に起こっていると考えられ、主節と従属節の関連づけ、つまり時制の同時性が保障される。

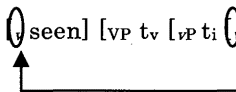
4. 分析

4.1. 知覚動詞の裸不定詞補文の受動文分析

(22b)は(22a)の構造を示す。(22a)のような受動文では能動文とは違って主節動詞は過去分詞になりフェイズを形成しない。(20)の仮定に従うと、主節動詞は補文内の動詞を引きつけることができない。従って、主節と従属節の時制が関連づけられず（従属節内の動詞の解釈不可能な V 素性が削除されず）、(22a)は非文法的になる。

(22) a. *John was seen draw a circle. (= (1b))

b. [CP C [TP John_i [T was] [_{VP} [_v seen] [_{VP} t_v [_{VP} t_i draw] [_{VP} t_v a circle]]]]]]]



4.2 知覚動詞の to 付き不定詞補文の TP 分析

(23b)は(23a)の構造を示す。(23a)ではtoが現れていることから不定詞補文はTP構造を有すると考えられる。つまり、ECM補文と構造は同じになる。(23b)の派生は、主節のv*とJohnとの間でAgree操作が適用され、v*の解釈不可能なφ素性もJohnの解釈不可能な格素性も削除され、収束すると考えられる。以下、(23a)が非文法的になる理由を明らかにする。

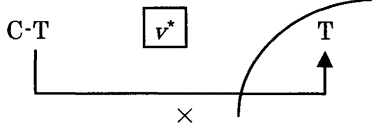
(23) a. *We saw John to draw a circle. (= (1c))

b. [CP C [TP we_i T [_{VP} t_i saw [_{VP} t_v [TP John_j [T to] [_{VP} t_j v* [_v* draw] [_{VP} t_v a circle]]]]]]]]]

まず、主節のTと主節のv*と従属節のTとの関係を考えてみる。その関係

図は(24)のようになる。

(24) 主節のTと主節の v^* と従属節のTとの関係図



(23b)では主節のTと従属節のTとの間に主節の v^* phaseが介在している。(21)に示すPICにより、主節のTは従属節のTにアクセスできない。その結果、主節のTと従属節のTとの時制の関連付けに v^* が干渉することになる。つまり、主節の v^* の意味が時制解釈に関わることになる。そこで、主節の v^* の意味がどのように主節のTと従属節のTの時制解釈に関与するかを考えてみる。(25)は、不定詞補文の意味が大きく分けて[+event]か[-event]に分けられることを示している。(25a,b)のコントロール補文のように[+event]を表す場合、主節の動詞に対して、未来の解釈が得られる。一方、(25c,d)のECM補文のように[-event]を表す場合、主節と従属節が同時である解釈が得られる。(26)はこの事実をまとめたものである。(27)は、主節動詞と補部との整合性をまとめたものである。

(25) to+[+event]を表す補部と to+[-event]を表す補部

- a. I promise to do it. (Ishii 2006: 223)
 b. John wants to buy a new computer. (ibid.)
 c. We believe John to be intelligent.
 d. I consider him to be a liar.

(26) 補部の意味と不定詞補文の種類と⁶

補部の意味	不定詞補文の種類
to + [+event] ⇒futurity	コントロール補文 (24a,b) ⁷
to + [-event] ⇒concomitance	ECM 補文 (24c,d)

(27) 主節動詞と補部との整合性

主節動詞	補部の意味
コントロール動詞	[+future]
ECM動詞	[-future] (= [+concomitance])
知覚動詞	[-future] (= [+concomitance])

(23a)の場合、(25)の表に示すコントロール補文と同様に、補文は to+[+event]を取るなので futurity の意味をもつと考えられる。しかし、知覚動詞が課す条件として、(27)の表に示すように、主節の出来事と補部の出来事が同時であること、つまり、補部の意味として[-future]を要することが考えられる。従って、(23a)で、補部が futurity の意味を有することと知覚動詞の課す条件が一致しないので、非文法的になると説明できる。

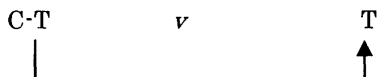
4.3 知覚動詞の to 付き不定詞補文の受動文分析

(28b)は(28a)の構造を示す。(24)と同様に、主節の T と主節の *v* と従属節の T との関係を示す。

(28) a. John was seen to draw a circle. (= (1d))

b. [CP C [TP John_i [T was] [_{VP} [_v seen] [_{VP} [_v t_v [TP t_i [to] [_{VP} [_v draw] [_{VP} t_v a circle]]]]]]]]]]]

(29) 主節の T と主節の *v* と従属節の T との関係図



(23a)とは違って、(28a)は受動文であるため、主節の T と従属節の T との間にフェイズが介在しない。従って、主節の T は従属節の T にアクセスでき、それらの時制の関連付けに *v* は干渉しないことになる。それで、

主節の T と従属節の T はどちらも解釈可能な Tense 素性を持つために、整合が適切に行われ、補部は[+event]であっても[-event]であっても構わないことになる。このように、(28a)の文法性を説明できる。

5. 分析の拡張

5.1. Chomsky (2005)の主語の島に関する分析

(30a)は、主語の島からの抜き取りができないことを示している。

(30) a. *Of which car did the driver cause a scandal?

b. Of which car was the driver awarded a prize?

(Chomsky 2005: 13)

しかし、この「主語の島」の制約では(30a)と(30b)の違いが説明できない。そこでChomsky (2005)は、この違いを(31)に表されるような抜き取られる要素の基底位置の違いによって説明している。(30a)は (strong) phase v^* を伴う例で(31a)の構造を有し、(30b)はunaccusative/passiveを伴う例で(31b)のフェイズのない構造を有する。

(31) a. C [T [_{α} [the driver of which] [v^* [V XP]]]]

b. C [T [v [V [the driver of which]]]]

Chomsky (2005)は(31a)のフェイズ α 内の which はフェイズの中に埋め込まれており、埋め込まれているものを抜き取るのにはコストがかかるため、(30a)は非文法的になると分析している。しかし、興味深いことに、裸不定詞補文にその反例ともいえる例が存在する。それを(32)に示す。(32)は裸不定詞補文の補文主語からの wh 句の抜き取りが可能であることを示している。

(32) a. Which actor_i did you see [a friend of t_i] talk to Mary?

(Declerck 1983: 115)

b. Which community_i have you seen [a member of t_i] walk naked
in the park? (ibid.)

(31)に倣い、(32)の構造を記すと、(33)のようになると考えられる。

(33) a. C [T [_v* [V [_α [a friend of which actor] [_v* [V XP]]]]]]

b. C [T [_v* [V [_α [a member of which community] [_v* [V XP]]]]]]

(32a,b)の補文内の動詞は非能格動詞であるため、(31a)と同様にフェイズを形成し、そのフェイズ内に *wh* 句が埋め込まれることになる。しかし、それにも関わらず、抜き取りは可能であり文法的になっている。従って、Chomsky のフェイズ理論だけでは(32a,b)で示した裸不定詞補文の補文主語からの *wh* 句の抜き取りができる事実を説明できない。しかし、英語において *verb raising* が非顕在的に起こるという前提で den Dikken (2006a,b)の動的なフェイズ理論を援用すれば、(32a,b)の事実を適切に捉えられる。これに関しては次節で議論する。

5.1.1 主要部移動と裸不定詞補文の主語からの *wh* 句の抜き取り

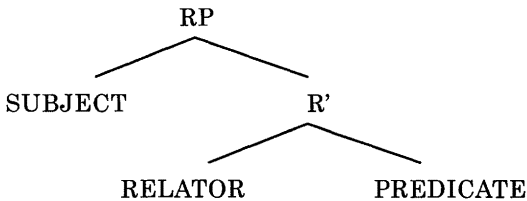
den Dikken (2006a,b)は、(34)に示されているように、*predication*(叙述)関係の構造を本来のフェイズであると考えている。(35)はその叙述構造を表し、基底位置の主語と述語を関係付けるものとして *RELATOR* があると仮定している。(36)の *phase extension* は主要部移動によってフェイズが拡張することを表している。そしてそのフェイズの拡張により、元々のフェイズはフェイズでなくなり、新しくできたフェイズのドメイン内にあることになる。

(34) *Inherent Phase*

an inherent phase is a predication (subject-predicate structure)

(den Dikken 2006b: 1)

(35)



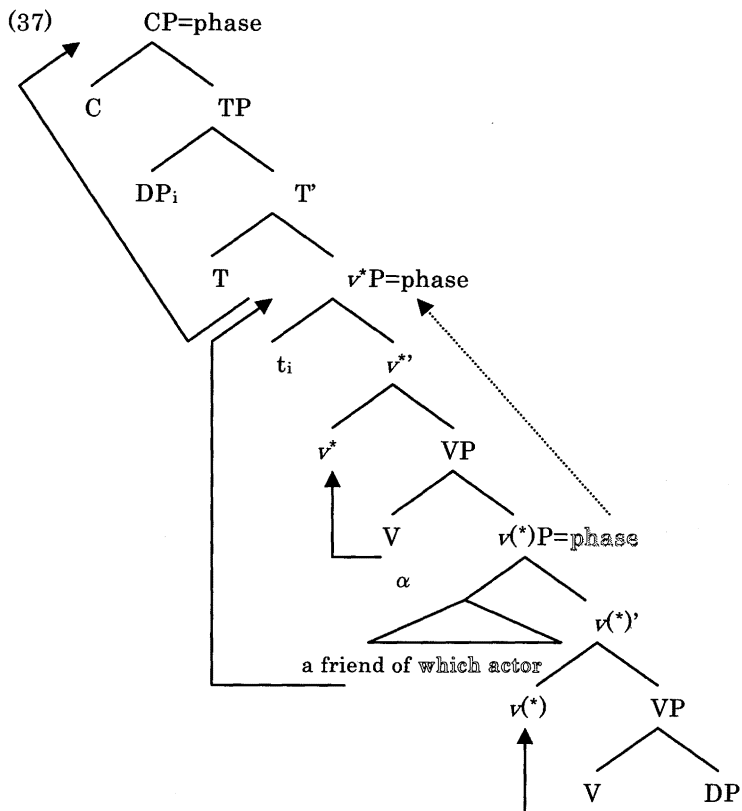
(den Dikken 2006a: 3)

(36) *Phase Extension*

syntactic movement of the *head* H of a phase α up to the head X of the node β dominating α extends the phase up from α to β ; α loses its phasehood in the process, and any constituent on the edge of α ends up in the domain of the derived phase β as a result of Phase Extension

(den Dikken 2006b: 1)

ここで、Chomskyのフェイズ理論とden Dikken (2006b)の主要部移動によりフェイズが拡張する動的なフェイズ理論をどちらも援用する。裸不定詞補文の場合、RELATORが v^*+V として顕在化し、主要部移動をしてフェイズが拡張すると考えられる。(32a)の派生を(37)に示す。(32b)も同様の派生になると考えられる。



まず、補文の v^*+V が主節の v^*+V に非顕在的に主要部移動をし、融合体を作る。その主要部移動により、フェイズが補文の v^*P から主節の v^*P へと拡張する。補文の [Spec, v^*P] にある DP (α) は主節の v^*P の domain 内にあることになる。そして、主節の v^* の Edge Feature により、wh 句は主節の outer [Spec, v^*P] に移動する。最後に、C の Edge Feature によって wh 句は [Spec, CP] に移動して派生は収束する。従って、Chomsky のフェイズ理論だけでは説明できなかった裸不定詞補文の補文主語からの wh 句抜き取りができる事実を、verb raising (主要部移動) と den Dikken (2006a,b) の動的なフェイズ理論によって説明できると考えられる。

5.2 イタリア語・フランス語の裸不定詞補文

イタリア語とフランス語には 3.2 節で上げたドイツ語・オランダ語と同様に、裸不定詞補文が存在すると考えられている。

- (38) a. *Ho visto Paolo rubare una macchina* (Italian)
 b. *J'ai vu Paul voler une voiture* (French)
 'I have seen Paul steal a car' (Guasti 1993: 115)

しかし、主節動詞の受動化に関しては二言語間で異なった振る舞いをする。イタリア語では(39a)に示すように、主節動詞の受動化ができる一方で、フランス語では(39b)に示すように、主節動詞の受動化ができない。

- (39) a. *Gianni è stato visto mangiare una mela*
 G. was seen eat an apple (Pollock 1994: 302)
 b. **Jean a été vu manger une pomme*
 J. was seen eat an apple (ibid)

(38a)と(39a)の事実から、イタリア語の裸不定詞補文は英語のECM補文と似た振る舞いをする事がわかる。また、フランス語の裸不定詞補文は(38b)と(39b)から英語の裸不定詞補文と同様の振る舞いをする事がわかる。このことから次のような予測が成り立つ。それは、イタリア語の裸不定詞補文は英語のECM補文と同様にIP (TP)構造を有し、フランス語の裸不定詞補文は $v^{(*)}$ P構造を有するということである。実際、二言語間の裸不定詞補文に関して、主節動詞の受動化に関する違いの他に、ゼロ主語の認可に関しても違いがある。

- (40) a. *Ho visto rubare dei libri, PRO nascondendoli sotto il cappotto*
 (I) have seen steal some books, PRO hiding them under the coat
 (Guasti 1993: 123f.)

b. **J'ai vu voler des livres, PRO en les cachant sous le manteau*

I have seen steal some books, PRO hiding them under the coat
(ibid.: 124)

(40a)から、イタリア語においては、*rubare* ‘steal’ のゼロ主語(pro)が付加詞節内の PRO をコントロールしている。それに対して、(40b)に示すフランス語においては、ゼロ主語が生起できないために非文法的になっている。一般に、ゼロ主語が生起するということは、それを認可する head、つまり TP が存在すると考えられている。従って、(40)の事実はイタリア語の裸不定詞補文には TP が存在し、フランス語の裸不定詞補文には TP が存在しない一つの証拠と考えられる。(39)と(40)に挙げた事実から、イタリア語とフランス語の裸不定詞補文の違いは、補部に TP があるか否かということである。そして、それが知覚動詞の受動化に関係していることがわかる。それは、4 節の、英語において不定詞標識の *to* のあるなしで受動文に文法性の違いが現れることからわかる。以上のことから、イタリア語の裸不定詞補文は、英語の ECM 補文に、フランス語の裸不定詞補文は英語の裸不定詞補文に類似した振る舞いをする、そして、それから、補部に T が存在することと主節動詞が受動化できることとの間には密接な関係があることが想定できる。

5.3 スウェーデン語における主節動詞の受動化

4.3 節と 5.2 節で、主節動詞が受動化できることと補部に T が存在することとの関わりを述べた。この節では、4.1 節で述べた主節動詞がフェイズを形成するかしないかが主節動詞が受動化できるか否かに関わることを議論する。その関係は、スウェーデン語の裸不定詞補文の受動化に関する統語的振る舞いからわかる。スウェーデン語には(41)に示す 2 つのタイプの受動文が存在する。一つは、(41a)に示す *s-passive* と呼ばれるもので、主節動詞に屈折を表す *s* をつけて派生されるものである。二つ目は、(41b)に示す *bli-passive* と呼ばれるもので、助動詞と、数と

性で主語と一致する分詞を使って派生されるものである。二つ目のタイプは、オランダ語やドイツ語、英語に見られるものと同様の形を有するものである。

- (41) a. *På den tiden **tala-de-s** franska vid hovet*
 at that time spoke-S French at the.court
 “At that time, French was spoken at the court”
 (Engdahl 2006: 23)
- b. *Talar-na **blev avbrut-na** flera ganger*
 the.speakers became interrupted-PL several times
 “The speakers were interrupted several times” (ibid.: 24)

ここで、スウェーデン語における裸不定詞補文とその受動態に着目してみる。スウェーデン語においても、英語と同様に、(42a)に示すような裸不定詞補文が存在する。ここで興味深いことは、スウェーデン語の裸不定詞補文において、(42b)に示すように s-passive は可能であるのに対して、bli-passive は(42c)に示すように不可能であるということである。

- (42) a. *Jag hör Peter sjunga en sang*
 I hear Peter sing a song
- b. *Peter hördes sjunga en sang*
 Peter was heard sing a song
- c. **Peter blev hörd sjunga en sang*
 Peter was heard sing a song (Bennis and Hoekstra 1989: 37)

(42b)と(42c)の文法性の違いから、主節動詞の形態が受動化できるかどうかに関わっている。この事実を 4.1 節で挙げた Chomsky のフェイズ理論に沿った裸不定詞補文の分析と照らし合わせてみると、主節動詞がフェイズであるかどうかで受動化に関する振る舞いが異なることがわかる。つまり、(42b)では、動詞 ‘*hördes*’ は動詞の一形態でありフェイ

ズを形成すると考えられる。そして、主節動詞がフェイズの主要部であるので補文内の動詞を引きつけて主節と従属節の時制が関連づけられる。一方、(42c)は、英語やオランダ語と同様に非文法的であり、主節動詞は過去分詞になっているため、フェイズを形成しない。従って、主節動詞は補文内の動詞を引きつけられず、主節と従属節の時制が関連づけられないため、非文法的になると説明できる。

6. まとめ

本稿では、英語の裸不定詞補文は $v(*)$ P 構造であり、to 付きの不定詞補文は TP 構造であると提案した。また、裸不定詞補文が $v(*)$ P 構造である証拠として、裸不定詞補文と ECM 補文との相違点とゲルマン語系の言語の裸不定詞補文との共通点を挙げた。次に、ゲルマン語系の言語では顕在的に起こる *verb raising* が英語では非顕在的に起こっていることを示した。そして、最後に 4 節の分析を支持する証拠として、主語の島の現象とイタリア語、フランス語、スウェーデン語の裸不定詞補文に関する文法的特徴を取りあげた。それにより、*verb raising* の存在が支持され、主節動詞がフェイズになるかどうかと補部に T が存在するかどうかは裸不定詞補文の受動化に関する振る舞いと密接に関わることを説明した。

本論文の分析の理論的な意義は、主節と従属節の整合性、具体的には、主節動詞の受動化に関する文法的特徴と主節と従属節の時制の関連づけに関して、Chomsky のフェイズ理論の援用により理論的に説明が可能であることを示すことができた点にある。

註

- * 本論文の作成にあたっては、西岡宣明先生から示唆に富むたいへん有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者の責任である。

1. 本稿では *We saw John to be intelligent.* のような「間接知覚」の意味を持つ

知覚動詞については扱わない。

2. Chomsky (2001:13)に従い、vPが内項だけでなく、特に外項を伴う場合、v*Pとして区別する。また、*に括弧をつけているのは、(i)のように知覚動詞の補文主語位置にthereが生起することを踏まえている点にある。

- (i) a. ?At three o'clock, we heard there begin to be a knocking sound.
 b. I've never seen there be so many complaints from students before.
 c. We saw there run into the room a man so handsome that he must
 have been a movie star. (Safir 1983)

there 構文に生起する動詞は、一般に存在・出現を表す非対格動詞である。非対格動詞はフェイズを形成しないと考えられるため、補文は v*P でなく、vP である。v は v* とは違って行為者の θ 役割を付与しないため、 θ 役割付与を必要としない there は [Spec, vP] に生起できると考えられる。

3. Declerck (1982 : 2)に*What we saw was the moon rise over the mountain.とある。
4. 補部の eat kelp は一見出来事のように考えられるが、恐竜の習性を表すという点で永続的な状態を表すと分析される。
5. ドイツ語とオランダ語の verb raising に関する違いは、ドイツ語においては、原形動詞が主節動詞の左に生起するのに対して、オランダ語においては、原形動詞が主節動詞の右に生起するという点である。
6. Ishii (2006: 223)は主節と従属節との整合性に関して、主節述語の意味が関与すると述べている。

The tense interpretation of an infinitive complement is determined by the lexical meaning of the matrix predicate.

7. Martin (2001: 147)はコントロール不定詞の tense は would か should に近いと述べ、(i a)と(i b)が同様の時制解釈を持つと分析している。

- (i) a. Ginny remembered to bring the beer.
 b. Ginny remembered that she would bring the beer.

参考文献

- Ishii, Toru. (2006) "On the Relaxation of Intervention Effects," *Wh-Movement: Moving on*, L. Cheng and N. Corver, Cambridge, MIT Press, 2005.
- Bennis, H. and Hoekstra, T. (1989) "Why Kaatje was not heard sing a song," In *Sentential complementation and the lexicon: Studies in honor of Wim de Geest*, ed. by Dany Jaspers, Wim Klooster, Yvan Putseys, and Pieter Seuren, 21-40. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam. (2005) "On Phases," ms.MIT.
- Chomsky, Noam. (2005) "On Phases," ms, MIT.
- Clément, D. (1971) "Satzeinbettungen nach Verben der Sinneswahrnehmung im Deutschen," In *Probleme und Fortschritte der Transformationsgrammatik*, D. Wunderlich (ed.), 245-265. München: Hueber.
- Declerck, R. (1983) "The structure of infinitival perception verb complements in a transformational grammar," in L. Tasmowski & Dominique Williams, 105-128, Plenum Press, New York.
- Diesing, Molly. (1992) *Indefinites*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Dikken, Marcel den. (2006a) *Relators and Linkers: The syntax of predication, Predicate Inversion, and copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dikken, Marcel den. (2006b) "Phase Extension -Contours of a Theory of the Role of Head Movement in Phrasal Extraction," Ms.
- Engdahl, Elisabet (2006) "Semantic and syntactic patterns in Swedish passives," In B. Lyngfelt & T. Solstad (eds.) *Demoting the Agent*. John Benjamins, Amsterdam, 21-45. (pdf)
- Evers, A. (1975) "The Transformational Cycle in Dutch and German," Ph.D. Dissertation, University of Utrecht [Distributed by the Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Ind.].

- Felser, Claudia. (1998) Perception and control: A minimalist analysis of English direct perception complements. *Journal of Linguistics* 34:351-386.
- Felser, Claudia. (1999) *Vverbal Complement Clauses: A Minimalist Study of Direct Perception Constructions*. –Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Felser, Claudia. (2000) “ Aspectual Complement Clauses and the (Un-)Availability of Verb Raising,” Final version appeared in H. Janssen (ed.) *Verbal Projections*. Tübingen: Niemeyer, 163-193.
- Geest, W. de. (1970) “ Infinitiefconstructies bij verba sentiendi ” *Studia Neerlandica* 3: 33-59.
- Guasti, M. T. (1993) *Causative and perception verbs: a comparative study*. Torino: Rosenberg & Sellier.
- Johan, Rooryck. (2000) “ Raising, ” *Configurations of sentential complementation*, London.
- Martin, Roger. (2001) “Null Case and the distribution of PRO,” *Linguistic Inquiry* 32: 141-166.
- Matsuyama, Tetsuya. (1999) “Transparency in Bare Infinitival Complements in English and Overt Feature Movement,” *English Linguistics* 16: 2, 405-435.
- Mittwoch, A. (1990) “On the distribution of bare infinitive complements in English,” *Journal of Linguistics* 26: 103-31.
- Nakajima, Heizo. (1991) “Reduced Clauses and Argumenthood of AgrP,” *Topics in Small Clauses*, ed. By Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 39-57, Kurosio, Tokyo.
- Pollock, J.-Y. (1994) “Checking theory and bare verbs,” In *Paths Towards Universal Grammar: Studies in Honor of Richard S. Kayne*, G. Cinque, J. Koster, J.-Y. Pollock, L. Rizzi and R. Zanuttini (eds.), 293-310. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Printzhorn, Martin (1990) “Head Movement and Scrambling Domains,”

- Scrambling and Barriers, ed. by Gunther Grewendolf and Wolfgang Sternefeeld, 199-216, John Benhamins, Amsterdam.
- Radford, Andrew. (2004) *English Syntax: An introduction*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Ruyter, L. (1988) "Bare infinitivals, INFL and psedo-progressives in Dutch," *McGill Working Papers in Linguistics: Special Issue on Comparative Germanic Syntax* 260-79.
- Safir, K. (1993) "Perception, selection, and structural economy," *Natural Language Semantics* 2: 47-70.